

II 本校の研究について

研 究 部

1. 研究テーマ

『自立に向かう子どもたち』

—自分で決める場を大切に—

2. 研究の経緯

本校では、「自己教育力」の育成を中核として研究を進めてきている。平成6年から8年まで『豊かな感性を育む』を研究テーマとして、子どもたちの豊かな感じ取りを育むという点に焦点を当てて研究を行なった。このテーマの下、“どのような場を設定し、どのような学習ステップを設け、その各ステップにおいてどのような支援としての手立てを講ずれば、一人ひとりの子どもが自分の実感を基にした、その子ならではの見方・感じ方がもてるようになるかということ”を各教科・領域において明らかにした。

また、その過程において学習面だけでなく「子どものくらし」全体を見据えたトータルな視点が必要であることが明らかになった。そこで、子どもたちの現在の課題や今後身につけてほしい資質や能力などを考え併せて導き出したのが「自立」である。

それを受け、平成9年度より研究テーマを『自立に向かう子どもたち』とし、めざす子ども像を「発達段階に応じて、他との関わりのなかで、自ら考え、判断し、行動できる子ども」として研究に取り組んできている。ここでいう、「他」とは、自分以外の他人・物・自然など、自分を取り巻くすべての環境のことである。これらとの関わりのなかで、主体的に思考する態度や問題解決能力を身につけることにより、自分に自信を持ち、自分らしさを追求していく子どもに育つことをめざしている。

3. サブテーマの設定

子どもたちの「自立」に向けての切り込み口として、本校では、「自分で決める場」を大切にすることを考えた。自分で決めるためには、既存の知識や経験を総動員しなければならない。また、課題を真剣に受け止め、自分なりに納得のいく追究をしたいという気持ちから没頭的な活動となりやすくなる。この過程から、その子ならではの学び方や考え方が創造されると考えた。さらに、成功・失敗の原因を自らふりかえり、次への活動意欲が湧きやすくなる。

このような活動の繰り返しにより、子どもたちは、自分らしさや自分のよさに気づくようになると考えた。この一連の流れが「自立に向かう姿」である。

4. テーマ実現に向けての取り組み

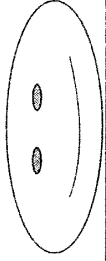
テーマ実現のため、手立てとして3本の柱を考えた。

自立に向かう姿

自分に自信を持ち、自分らしさを追求していく



自分らしさや自分のよさに気づく



- ◎ 次への活動意欲
- ◎ 問題解決能力
 - ・ その子ならではの学び方や考え方を創造する
- ◎ 主体的に思考する態度
 - ・ 既有的な知識や経験を総動員する
 - ・ 没頭体験
 - ・ 成功、失敗の原因を自らふりかえる

自分で決める

人・物・自然

自分で決める

人・物・自然

- ①教科・領域の授業
- ②学校行事の見直し
- ③総合的な学習の創設・充実

5. これまでの取り組み

(1) 第1年次（平成9年度）

① 教科・領域の授業

各教科・領域において、それぞれ「自立に向かう子ども像」を明らかにするとともに、その具体化に向けての「研究の方向性」を考えた。

② 学校行事の見直し

各学校行事が、研究テーマにそった内容になっているかどうかを検討し、精選・補充を行った。特に、集団宿泊的な行事がテーマ実現のために重要な位置を占めることから、第3学年から実施した。

③ 総合的な学習の創設

研究テーマの実現に向けて教育課程を検討していく過程で、現在の教科・領域の枠に限定されない、一人ひとりの子どもの興味・関心に基づいた追究活動が展開される学習が必要であると考えた。この学習は、“自らの課題を設定し、自らの解決方法で、自らのペースで、失敗を恐れず自らの結果を出し、自らの方法で表現し、ふり返る”という流れで行うが、その中で子どもたちは、実感を大切に活動し、達成感を味わうと思われる。この体験は、以後の学習（教科・領域も含む）や生活において、考えたり、判断したり、行動したりするための基となる。中でも重視したのが、次ぎに挙げる活動である。

- (ア) 自然・人間との一体感が味わえる体験活動
- (イ) 自分で立てた計画にそって学習を進める体験
- (ウ) 自分の興味・関心に基づいた追究活動
- (エ) 自己理解（自分見つけ）に向かう活動
- (オ) コンピュータの活用

以上のような基本的な考えを基に、「総合的な学習」を創設した。

その第1歩として、「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4つのプロジェクトを編成し、領域別年間計画を作成し、ねらいの達成に向かった。

(2) 第2年次

① 教科・領域の授業

教科・領域においては、教科ごと、単元ごと、さらには、学習展開の場面の違いより、「自分で決める場」は、いろいろな形をとるものと思われる。いずれの場合も、自分で決める場を設けることにより、子どもたちの学習態度は、他律から自律へ、受動から能動へ、結果重視から過程重視へと変化していくことが期待できる。「自分で決める場」の質的な向上をめざし、各教科・領域における基本的な考えを出し合い研修を深めていった。

② 学校行事の見直し

第1年次（平成9年度）の見直しを基に、さらに微調整を行った。総合的な学習との関連を明確

化していった。

③ 総合的な学習の充実

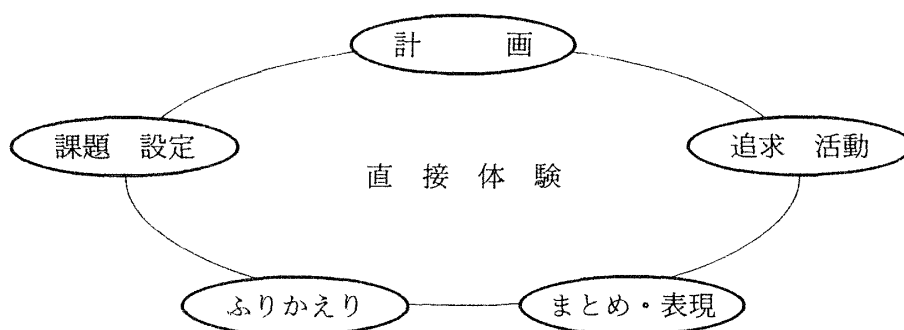
(ア) 学年別年間活動計画の作成

第1年次（平成9年度）の領域別活動計画の実践・反省を基に、学年別年間活動計画を作成し、「実践を積み重ねる」ことに焦点を当てた研究を行った。

(イ) 基本的な学習の流れ

本校では、総合的な学習を進めるに当たって「直接体験」を重視している。それは、体全体を通しての体験は、実感、達成感、自分発見などの重要なものを子どもたちに与えるにとどまらず、人格の形成にも深く影響すると考えるからである。また、その後の追究活動を進める段階においても、方向性を与えるとともに意欲も喚起してくれる。そのため本校では、体験のみに終わることなく、体験をふりかえり、体験から得たものを焦点化させ、追究課題へと実らせる過程を大切にしている。

本校では「直接体験」を中核とした、基本的な学習の流れをこのように考えている。



(ウ) 学習環境整備

総合的な学習が、子ども主体の活動になり、子どもの思いに応えるためのものとなるよう、次の学習環境整備を行った。

○人的環境整備

担任，専科，保護者によるネットワーク体制づくり

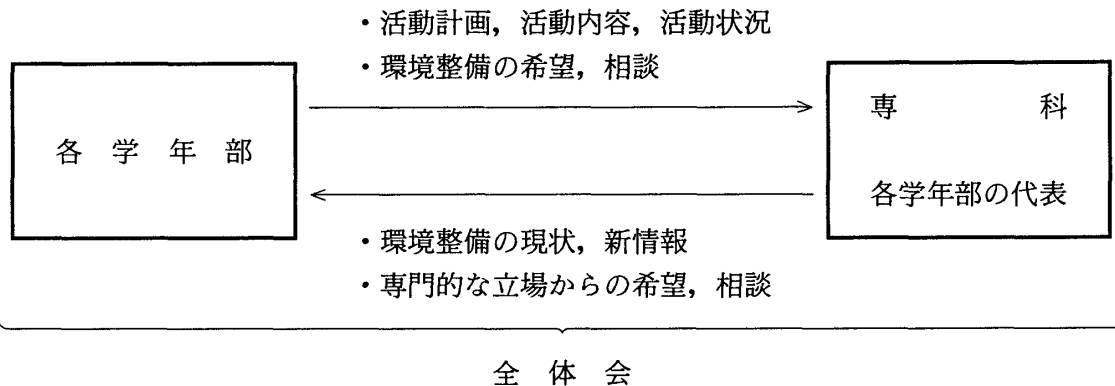
○物的環境整備

- ・体験場所，公共施設に関する資料整備
- ・インターネット整備
- ・図書室・特別教室の整備・充実

○場の整備

- ・発表・展示会
- ・掲示板・放送などの利用

なお、環境整備に関する手順は、おおむね次のような流れになる。



(エ) 教科・領域との整合性

総合的な学習と、教科、道徳、特別活動との内容の関連について整理をし、本校の考える総合的な学習の位置づけを明らかにした。

どの教科・領域においても「めざす子ども像」に変わりはない。研究テーマ「自立に向かう子どもたち」をめざして、教科、領域、総合的な学習のそれぞれの特性を活かした活動を展開していくという立場から話し合った。

《特別活動》

- ・集団活動
- ・集団としての自覚
- ・自主的・実践的態度

《道徳教育》

- ・道徳的心情
- ・価値
- ・道徳的实践力

《総合的な学習》

- ・自己決定
- ・自分自身を高め、伸ばす、振り返る

もちろん、子どもたちの実態に応じてそれぞれの活動が展開されること、結果ではなく過程を重視していくことなど大きな共通点もある。

(3) 本年度（第3年次）

① 教科・領域の授業

研究テーマおよびサブテーマを決定し、取り組み初めて3年目を迎える。そこで次のような観点で研究を進め、成果と課題をまとめた。

(ア) 教科の基本的な考えについて

各教科において、自立した子ども、あるいは自立に向かう子どもの姿（どんな力・態度を身につけているのか）を明らかにした。

(イ) 具体的な取り組みについて

各教科において1年生から6年生までの間に、子ども達が自立するために重要な節目となる「自分で決める場」がいくつもある。その節目において、その場を、一人ひとりの子どもによってより質の高い自己決定の場とするためには、場の設定の仕方が重要な意味を持つ。また、それまでの学年の学習やその単元における前時までの支援となる取り組みや手立ても必要である。さらに、節目において行われた自己決定がその後の自己決定の場とどのような関わりをもち、どのように活かされていくのかという見通しをもつことも必要である。以上の3点からふり返りを行った。ふり返りの視点としては、「自分で決める場」設けることにより、子ども達の学習態度が、どのように他律

から自立へ、受動から能動へ、結果重視から過程へと変容したのかという子どもの実態を元に行った。児童の実態把握の方法は、いろいろあるが各教科、および授業に合わせて各教科ごとに判断して行うこととした。

② 学校行事

今年度も引き続き次の2点について取り組んだ

- (ア) テーマ実現に向け、行事のねらい・内容・運営方法について検討し、見直しを図りながら実践していく。
- (イ) 総合的な学習との関連を検討し、年間活動計画に位置づけていく。

以上の2点を、6年生の総合的な学習「人間」領域の単元“はずむ「心」、そして「協力」で説明する。

本校の運動会では、子ども達は、赤、白、緑、青の4つの色組に別れている。そして、各色組ごとに応援合戦を繰り広げる。運動会の終了時点で、毎年6年生が勝っても負けても涙を流す活動である。6年生は、計画を立て、1年生から5年生までをまとめていくのだが、計画を立てる過程で、本音を出し合い、ぶつかり合う。この友達との関わりが、相手を理解したり、自分を見つめ直したりする場となる。これまで取り組んできた応援合戦を見直した結果、この部分が総合的な学習の人間領域のめざしているねらいと重なるので、この活動を人間領域に位置づけ、時間数も総時間数19時間のうち、5時間を総合的な学習としてカウントしている。(くわしくは、総合年間活動計画および実践集参照)

③ 総合的な学習の充実

(ア) 年間活動計画の作成

今年度は、複式学級用も新たに作成し、単式用、複式用、養護学級用のすべての学級を網羅した年間活動計画を作成した。作成するに当たって重視したことは、各学年において、昨年度の活動計画を基に、子どもを中心に据え、教科・領域と総合的な学習とのバランスや、他行事との関連、1年間の生活のリズムなどを考慮に入れ、それらが子どもの中で有機的に作用し、一人ひとりの子ども達が自立に向かえるようにした点である。

(イ) 基本的な学習の流れにおける手立てや支援

基本的な学習の流れは、昨年度考え、それを基に実践を重ねてきたが、総合的な学習がより成果を挙げるよう基本的な学習の手立てや支援のあり方を明らかにすべく取り組んだ。これにより、総合的な学習についての蓄積ができ、これからますます充実・発展させていくことができるのではないかと期待している。また、これは、教師の負担軽減にも役立つものと思われる。

(ウ) 学習環境整備

今年度も引き続き、学習環境を充実させるために取り組んでいる。

7. 研究推進組織（総合的な学習）

取り組みを充実したものにするために、以下のような組織で研究を推進していく。

チーフ会（各総合領域代表，学年部代表，研究部より2名）

									(高学年部)
									(中学年部)
									(低学年部)
	(人間)	(環境)	(自分タイム)	(コンピュータ活用)	(障害児教育)				

《チーフ会》

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連についての見直し
- ・総合的な学習のねらいの検討
- ・各総合領域間，各学年部間の調整

《学年部会》

- ・各総合領域配当時間の検討，年間活動計画の作成
- ・基本的な学習のねらいにおける手立て・支援のあり方の明確化
- ・環境整備のための希望・要求のまとめ

《総合領域プロジェクト》

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連についての再検討
- ・各総合領域のねらいと各学年部のねらいの調整
- ・基本的な学習の流れにおける手立て・支援のあり方の明確化
- ・全体のねらいと各学年の内容の検討

8. 授業時数について

- ・ゆとりの時間と火曜日の学級裁量の時間を活用し週2時間，1年を35週として考えると70時間となるが，他行事の関係から年間の総時数を60時間とする。
- ・総合各領域への配当時間は，下記の表に示す時間数を基本とするが，各学年に任せる。
- ・低学年においては，生活科を位置づける。但し，「コンピュータ活用」については，年間15時間を当てる。

	人 間	環 境	自分タイム	コンピュータ活用
低学年	/	/	/	15
中学年	15	15	15	15
高学年	10	10	28	12

単位：時間